

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Foreign language educational policy : analysing the Greek national project for the development of an examination system to measure levels of proficiency in European languages

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 晃直, Abe, Terunao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/668">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/668</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ギリシャの外国語教育政策

——習熟度国家検定試験制度 (KPG) を中心に——

阿 部 晃 直

## 1. 序

EU 憲法の批准の先行きが危ぶまれる中、ヨーロッパの文化・教育行政に於いては、ヨーロッパ市民の複言語主義 (plurilingualism) が、域内の移動を容易にする就労資格として着実に実現させられつつある。外国語教育において最も消極的であったイギリスでさえ、2002年に「国家言語戦略 (National Languages Strategy)」を打ち出し、自国民の外国語能力の養成に本腰をあげた。今年2005年3月に発表した1億1千5百万ポンドにのぼる向こう3年間の言語教育予算は、それを裏付けるものである。他のヨーロッパの国々も自国民の言語力の向上のため種々の計画を実行しているが、そのような中、ギリシャの「言語熟達度国家検定試験制度 (Κρατικό Πιστοποιητικό Γλωσσομάθειας)」—以下 KPG 試験制度—は、言語社会学的に大変興味深い。本稿は、英語の Cambridge 試験や TOEFL、仏語の DELF/DALF をはじめ世界的に外国語学習者の信頼を得てきたいわゆる語学力試験の大御所を相手に、ヨーロッパの中では経済、言語、その他いろいろな領域で力の小さいギリシャが国家プロジェクトとして開発に着手した試験制度を中心に、この国の外国語教育政策を分析してみようとするものである。

## 2. KPG 試験制度の開発

### 2.1. KPG 試験の概要

文部・宗教省のホーム・ページでは、この制度の説明を以下に示すような質問に答えるという Q & A の形式で行っている。<sup>1</sup> 英語版とギリシャ語版では質問項目の数、それらへの内容の配分や表現に関して若干の違いがあるが、ここでは英語版を中心に述べる。

- (1) KPG 試験とは何か？
- (2) 何を測るための試験か？
- (3) 何語の試験が受けられるのか？
- (4) どのようなレベルの試験があるのか？
- (5) 受験資格はどのようになっているのか？
- (6) ギリシャ語はどのような役割を持つのか？
- (7) この試験を開発した理由は何か？
- (8) どのような理論に基づいた試験か？
- (9) 試験の計画・実施にはどのような機関がかかわっているのか？
- (10) KPG 試験と他の言語資格・能力試験との関係はどのようになっているのか？
- (11) KPG 試験はギリシャ国家によってあるいは国際的に認定された試験か？
- (12) この試験に関してオンラインで得られる情報・資料にはどのようなものがあるか？
- (13) 教師や受験者が入手できるこの試験に関する出版物はどのようなものがあるか？

まず上記(1)～(5)及び(8)、(9)、(11)の質問に対する答えをまとめてみると、だいたい以下のように表現できる ((12)、(13)については省略する)。

KPG 試験は、文部・宗教省直轄の事業で、機能主義的な考えに基づいて、学習者の目標言語に関する熟達度、つまり目標言語を用いて実際の世界で何ができるかを測るものである。当面は英語、仏語、ドイツ語、イタリア語の4言語について行われるが、近い将来には西語についても行われる。また需要に応じて他のヨーロッパ言語の試験の可能性もある。<sup>2</sup>

これらの試験は、欧州評議会が策定した『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』（以下 *CEF*）の能力評価基準に準拠して作られ、Level A: Basic User—A1 Beginner, A2 Elementary; Level B: Independent User—B1 Intermediate, B2 Upper Intermediate; Level C: Proficient User—C1 Advanced, C2 Full Mastery の6つのレベルが最終的には用意されることになっている。2003年に B2 から始められ、2004年から C1 が加えられ、2006年には C2、そして2007年には B1 も始められることになっている。A1、A2 は、まだ行われていない。

一方、個々の試験問題は、Module 1: 読解と言語に対する意識 (language awareness)、Module 2: 自由作文と仲介 (mediation)、Module 3: 聴解、Module 4: 自由会話と仲介という4つのモジュールから構成されている。詳細には立ち入れないが、「仲介」の問題については、KPG 試験の考え方の上で重要な意味を持つので、(6) の答え（試験にギリシャ語が関係してくること）と共に次章で取り上げる。<sup>3</sup>

受験資格は、英語版では、ギリシャ国内に居住し、在学ないしは就労している EU 市民他となっている。しかし、ギリシャ語版になると、下線部が、それぞれ、合法的に居住し、全ギリシャ市民、ギリシャ系の人々、EU 市民、外国人というように条件が付いた上に細かくなっていて、この国のおかれた社会的、政治的な立場が窺える。

この試験の国内の公的な認知に関しては、すでに国立学校など国の機関に就職する際に必要な資格を決定する ASEP (Ανώτατο Συμβούλιο Επιλογής Προσωπικού) という組織に就労資格の一つとして認められて

いる。しかし、国際的には上で触れた CEF の評価基準に準拠して作成し言語資格の相互比較・認定の容易性や透明性の確保が図れるようにする一方で、文部・宗教省が ICC-Europe という国際組織に加盟するなどして、信用を得る準備が整いつつある段階にある。<sup>4</sup>

最後に、他の試験との関係については、次のようなことが述べられている。KPG 試験は、ギリシャ及びヨーロッパの社会に当てはまるように作られた国家試験で、この点、英、仏、独、伊語などの大規模な国際的試験（例えば Cambridge exams や Michigan Language exam）とは性格を異にしている。また、それは、これらのいわゆる「強い言語」の試験にしばしば結びついている物質的、象徴的利益を追求するものではない。これらの点は、次節で述べる政府による KPG 試験制度開発の政治的決断を促した背景理由の一部になっており、上出の「仲介」問題の意味と同様この試験を特徴付ける大きな要素である。

## 2.2. KPG 試験制度開発の理由

この熟達度検定試験制度開発の理由は、ギリシャ文部・宗教省のホームページにギリシャ語、英語の両方で公表されている一方で、政府から開発を委嘱された委員会の委員長等によって他の場所でも解説付きで明らかにされている。本稿では、それらを相互に参照し、総合して述べることにする。

KPG 開発の理由は、直接的には質問（7）に対する答えとして与えられ、次の諸点が挙げられている。

- a) ヨーロッパ諸言語の社会的に等価とみなされるような統一された試験制度を作ること
- b) 何語であれヨーロッパの言語の熟達度を就労資格の一つとして認めること
- c) 国内に多くの言語が共存し個人が複数の言語を使用する状況を促進すること及び EU 内外で教育上及び職業上の移動のための資産とみなさ

## れる外国語学習を促進すること

これらは、文部・宗教省のホーム・ページに載せられている表現をほぼ逐語的に日本語に移したものであるが、このままではこれらの理由を持つに至った背景がよくわからない。そこで、KPG 試験制度開発の実行及び試験委員会の委員長であるアテネ大学の Bessie Dendrinou (2003 : 3) が、ギリシャにおける外国語熟達度の検定試験及び検定が行われている外国語に関して次のような実情を報告しているの<sup>5</sup>ので見てみよう。

ギリシャの外国語熟達度の検定試験は、British Council, Goethe Institute, Institute Francaise d'Athenes などの物質的、象徴的利益を追求する外国の大きな機関によって行われ、当該外国語のギリシャの使用者の必要は殆ど考慮に入れられていない。別の言い方をすれば、例えば、ギリシャの英語学習者の必要は、フランスやスペイン、その他の国々の英語学習者の必要とは非常に異なるが、既存の試験ではその点がなおざりにされている。また、検定試験が行われる外国語は、英、仏、独、伊、西語といういわゆる「大言語」だけであり、検定試験は、それが行われる言語の有用性は認めるが他の言語の有用性は認めない一つの仕組みになっているばかりでなく、世界に於ける言語的、文化的力の不均衡な分布を再生産する手段にもなっている。例えば、ギリシャの大学生は、Erasmus という EU の交換留学制度でオランダやデンマークやポルトガルに行くが、ギリシャ国内でそれらの国の言語に就労資格の一つであるような価値が与えられていないため、それらを学ぼうとしない。また、新しく経済移民が東欧圏からやって来たりして、ギリシャ国内ではロシア語、ルーマニア語、ブルガリア語、ポーランド語など多くの外国語が話されている。しかし、これらの言語の検定試験はない。従って、就労資格の一つにも数えられず、それらの言語は、低く評価され有用性は認められていない。

さらに、アテネ大学の Bessie Mitsikopoulou (2003 : 3) は、KPG 試験開

発の背景事情として先ほど触れたような国際的な試験は、互いに評価方法が異なるため相互の比較が必ずしも容易でないという状況が存在することを報告している。<sup>6</sup> 言い換えれば、ヨーロッパにおける自由な人々の移動は、そこで使用されている言語をよりよく知って一層可能になるわけであるが、そのためにそれらの言語の知識（熟達度）の比較・相互認定を容易にしようという欧州評議会が進める施策も KPG 試験制度開発の背景としてあった。

ヨーロッパでは言語、文化の多様性の促進が謳われ、いろいろな事業が行われて来ているが、先ほど述べたような状況では絵に描いたもちのようなもので、実際の役に立たない。欧州委員会や欧州評議会が推進してきている言語や文化の多様性の維持・促進のための諸活動を実効性のあるものにするには、いろいろな小さな言語が有用で価値があるような社会的状況を構成各国が創出しなければならないというのが Dendrinós の考えで、KPG 試験は、そのような状況を作り出すための一つの方法、試みとして計画、実施された。

### 3. KPG 試験制度の言語社会学

#### 3.1 KPG 試験とギリシャ語

2.2 節では、KPG 試験制度が、いわば反「大言語」覇権主義を根底に計画された経緯を見た。本節では、しかしながら、KPG 試験制度は、そのような考え方に基づいているにもかかわらず、問題の中にギリシャ語を取り込むことによって、結局はこの制度もギリシャ国内ではギリシャ語の覇権を生み出す仕組みになっていることに注目したい。さらに、仲介という言語活動の概念自体に関しても若干の考察を加えたい。

ギリシャ語の役割に関する文部・宗教省ホーム・ページの質問（6）の答えは、次のように与えられている。<sup>7</sup>

- a) KPG 試験は、第二言語あるいは外国語としてのギリシャ語以外の言語の試験である。
- b) どの言語の試験を受ける場合にもギリシャ語の聴解及び読解力のあることが必要である。
- c) ギリシャ語が受験者の唯一の共通言語 (the common language) であると考えられるので、受験者は、ギリシャ語の指示やテストの説明書きを理解でき、またギリシャ語から対象言語に情報を移す仲介者の役割も出来ることが要求される。

ここで問題になるのは、どの程度のギリシャ語の聴解及び読解力が要求されているのかということであろうが、c) に言う「ギリシャ語の指示やテストの説明書きを理解でき、またギリシャ語から対象言語に情報を移す仲介者の役割も出来る」程度ということだけでは、要求されるギリシャ語の能力を今ひとつ理解しがたい。そこで、与えられるギリシャ語テキストの語数、それを読むのに与えられる時間という条件から要求されるギリシャ語能力を推測することにしてみよう。試験のレベルによっていくらか差があるが、低いほうの B2 レベルの口頭による仲介用のギリシャ語テキストを見ると 300~400 語ぐらいから成っている。また、試験官用の説明書を見るとこのテキストに目を通させる時間は約 1 分となっている。一つ上の C1 レベルになると、同じく口頭仲介用のテキストは、500 語までのものとなっていて、与えられる時間は「少し」と説明されている。<sup>8</sup> この部分は二人で 6~7 分 (Module 4 全体の試験時間が実質 15 分で、[仲介] の他に、試験官との対話 3~4 分、絵等の説明 5~6 分がある) なので時間的な余裕もないことは事実だが、仲介の情報源 (ギリシャ語) の語彙数、それに目を通すわずかな時間からして、母語話者並みのギリシャ語能力が前提にされていると理解してもよいだろう。

上で、いわゆるヨーロッパの視点を実現していくには小さな言語が有用で



価値があるような社会的状況を構成各国が創出しなければならない、という Dendrinós の主張を見たが、ギリシャの社会的状況にあった検定試験を標榜する KPG 試験は、ギリシャ語話者中心の「仲介」問題を含むことで、その視点あるいは理想とは裏腹に小さな言語である移民たちの言語等を周縁化し、ギリシャ語覇権を存続させる仕組みになったと言える。そこで、このことと後の 3.3 で触れるように、検定対象の言語がホームページのギリシャ語版では「EU 構成国、近隣諸国、中央及び東欧諸国の公用語（強調筆者）」となっていることを考え合わせると、下記のアンリ・ジョルダン（Henri Giordan 2004）の言葉は、言い得て妙と言わざるを得ない。

EU の歩みは、本質的なところで「国家の言語による多言語主義にとどまっているのである.... 各国は、そのアイデンティティにとって不可欠な要素である国語を、好きなように保護してかまわない.... たとえばフランスは... 憲法第 2 条を改定してフランス語の象徴的な地位を補強することにした。これはすなわち、ヨーロッパ建設によって強まりそのような英語の影響から、フランス語をよりよく守るための法的措置を練り上げるということに他ならない。(p.68)

次に、「仲介」という言語活動自体について考えてみよう。KPG 試験は、Module 2（作文）と Module 4（会話）の問題で「仲介」というギリシャ語から対象言語に情報を移す言語活動を含んでいる。CEF（4.4）では、この活動は次のように理解されている。

話し手、書き手は、何らかの理由で直接コミュニケーションがとれない人たちの間でコミュニケーションの経路として行動する。（しばしば、この二人は異なる言語の使用者である場合が多いが、必ずしもそうであるとは限らない。）この過程、すなわち仲介（mediation）は、相互の

やり取りの場合も、一方向の場合もある。

また、「仲介」活動には、要約や言い換えばかりでなく、通訳や翻訳も含まれている（*CEF* 4.4.4 参照）。

一方、KPG 試験の「仲介」は、例えば、B2 レベル試験の特徴記述の中では、次のように規定されている。

- d) ギリシャ語で刺激が与えられれば、一つの主題について対象言語で作文をしたり話したりできる
- e) 文書または口頭によるギリシャ語の資料の中心的な意味要点を対象言語で伝えられる
- f) 文書または口頭によるギリシャ語の資料の要約を対象言語でできる
- g) 文書または口頭によるギリシャ語の資料の基本的な情報を対象言語で伝えられる

C1 レベルでは g) がなくなっている。この逆方向の問題はないので、KPG 試験における「仲介」は、ギリシャ語から対象言語への一方通行となっている。また、採点者用の資料を見ると、与えられたギリシャ語資料の翻訳（文脈から判断して逐語訳の意）にはマイナス評価が与えられることになっており、「仲介活動」から除かれている<sup>9</sup>。従って、KPG 試験では「仲介」を *CEF* で考えられているよりかなり狭く捉えていることがわかる。

ギリシャという地域の社会的必要の一つが「仲介」活動であるならば、それは当然ギリシャ語と対象言語の間の一方向のものばかりでなく、しばしば双方向のものでもあろう。また、翻訳、通訳を必要とする場合も多々あるであろう。このように考えると、KPG 試験に「仲介」を含めた理由は、先に見たギリシャ語保護の手段以外には考えがたく、この試験が上で触れた ASEP という公務員登用試験と結び付けられることによってこれはますます

確実にされたことになる。

## 3.2 KPG 試験制度の受容とギリシャ人の言語態度

### 3.2.1 KPG 試験制度の受容

先に述べたように、KPG 試験は、2003年から始められ、対象の言語やレベルが漸増されてきて、また今後もそうされることになっている。応募者数は、2年目の2004年6月に行われたB2レベルの試験では次のようになっている。

英 語	16,909
仏 語	728
独 語	1,865
伊 語	2,352
計	21,854

マスコミの反応は、決して大きいとは言えず、政府発表の内容に加わるものはほとんどない。例えば、*Ta Néa* 紙（2004年11月30日）は、上表の試験結果を伝える中で、単に「KPG 試験の開設は、外国の団体が行っている試験よりもずっと受験料が少ないため、大きな反響を呼んでいる」と述べるに止まっている（強調筆者）<sup>10</sup>。また、同紙は、同じ記事の中で「この試験の開設は、特別な反響を呼んで、これまでに約70,000人が応募している」とも述べている。しかし、これは、2003年度（この最初の年は4月に独語と伊語、10月に英語と仏語、それぞれ一回だけ）も含む数字で、英語の Cambridge テスト2003年単年度の170,000と比べると、相当に少ない（Lukey-Coutso-costas 2004: A14）。他言語については資料を持たないが、この応募者数の著しい違いは、単に問題の試験の歴史の浅さによる認知度の違いから来るだけではないと思われる。特にいわゆる「大言語」である英語他のこれらの外国語に対するギリシャ人の伝統的な言語態度との関係も考えなければならない。

### 3.2.2 ギリシャ人の言語態度

ギリシャの外国語学科では、ギリシャ人の教師のクラスでも一般にそれぞれの対象外国語で授業が行われるのが常であるが、アテネ大学仏語・仏文学科の Rea Delveroudi は、こうした外国語学科の特徴を次のように説明している。それらの多くは、大使館の文化教育部門の末端機関として1950年代に設立され、教授陣は、それぞれの言語の母語話者であった。従って、講義は、必然その教授たちの言語で行われた。またこの慣習は、当時盛んであった学習者の母語を用いない直接教授法によって正当化されることとなった。そして、教授陣が殆どギリシャ人に入れ替わった今日に至っても、まだこの対象言語で講義を行う習慣は維持されている。Delveroudi (2004: pp.261-262) によると、これは、学習対象のヨーロッパの主要な言語・文化を自分のものよりもより高く評価する漠然とした傾向がギリシャ人の間にはあったからだとされる。この点を補強するために Delveroudi は、特に初期の現代ギリシャ人たちが、ヨーロッパの「大言語」と接することでヨーロッパ人のアイデンティティーを持ち得たのでそれらを過度に高く評価した、という A.F.Christides (A. -Φ. Χριστιδης 1999: 167) の指摘を挙げている。また、Elizabeth Mestheneos (2002: 180) は、ギリシャ人がその被支配の歴史の中で外国や外国人に自らの出世や自由また経済的幸福や生存の源を見つけてきたこと、そしてそのことが彼らが「外国人かぶれ」であることの理由の一部であり、この傾向は今日も残っていると述べている。この説明も、さきほどの Delveroudi による Christides の引用と同様、統合主義的態度の説明として理解できるのではないだろうか。

しかしながら、対象言語の母語話者との一体感を通してヨーロッパへの帰属意識を求めるギリシャ人の心理は、EUの一員としての国際的な認知を得た今日、言語によって必ずしも支えられる必要がなくなってきたことも本当であろう。外国語の教授／学習の目的が、母語話者あるいはその文化により接近することよりも、コミュニケーションのための共通語（リングア・フラ

ンカ) を教授／獲得することによって変わってきたことも指摘されている。<sup>11</sup> KPG 試験制度は、この意味では、ギリシャ人の母語話者中心主義の習慣からの心理的独立の証しとも言えよう。

### 3.3 KPG 試験制度とギリシャの社会

2.2で KPG 試験制度が、自己矛盾の側面はともかくとして、ギリシャ国内の豊かな言語資源の有用性・価値を創出するための試みとしても考えられていることを述べた。その際 Dendrinis は、例として近年の経済移民の言語を挙げているのを見た。文部・宗教省のホームページに掲載されている英語版の公式説明では、この点は単に「他のヨーロッパ諸語」とされているだけである。しかし、ギリシャ語版では、もっと詳しく（英・仏・独・伊以外の）「EU 構成国、近隣諸国、中央及び東欧諸国の公用語、またギリシャ国内で言語能力の証明の必要が生ずる他の言語（強調筆者）」となっている。このような言語が実際に何語であり得るのか、「証明の必要」の基準等は、関心のあるところであるが、明らかにされていない。いずれにせよ、本節では、KPG 試験制度によるこのようなヨーロッパの視点に沿った言語政策を必ずしも容易に許さないギリシャ国内の社会的状況があるので、それについて述べることにしよう。

現在総人口約1,100万のこの国では、19世紀前半の独立以来一貫してそのときどきの政府は、言語その他の点で共通の統一された国民意識をその領土に住む者の間に形成しようとしてきた。そして、その過程で唯一公的に認められた少数民族は、1923年の Lausanne 条約に規定された東部のトラキア地方のイスラム教徒だけである。しかし、この人々の認知も宗教的に異なるギリシャ語以外の言語を話す集団としての認知であって、異なった民族集団であるとは認めていない。Human Rights Watch (HRW) が発表している World Report 1999 (pp.1-2) によると、政府は、依然としてトルコ系の少数民族あるいはその人々の団体を指すのに「トルコ人 [の]」という民族を指す言

葉を使うことを禁じている。彼らを指す言葉は、「トルコ語を話す人々」である。また、その他の少数民族についても、「……語を話す」という表現を使用し、政府がその異なった民族としての存在を認めることは、最近になるまでなかった。<sup>12</sup> 例えば、1990年代に不法経済移民として大量に流入したアルバニア人や北部ギリシャに住むマケドニア人がいる。前者の場合は、1999年の国籍法19条の廃止によって不法移民（大半はアルバニア人と言われている）のうち40万人以上が初めて滞在許可を申請できることになった。一方、後者の場合は、2003年にギリシャ政府が1940年代後半の内戦後に隣国マケドニア共和国に亡命していたマケドニア人の一時帰国を許したことで国内のマケドニア人に公の場でその言語の使用さえ認めてこなかった政府の政策に変化が出てきたとされる。しかし、こうした少数民族に係る政策の新しい方向も決して楽観視出来るものではない。1997年に調印した「民族的少数者保護のための枠組条約」は、1999年に政府の多文化主義的政策が国民性に合わないとして議会、マスコミ等で酷評され、批准が出来なかった。

次に、学校（私学以外）における状況を見てみよう。2005年現在いわゆる「大言語」については、英語が必修科目として小学校3年から、仏語と独語が選択必修科目として中学校から、また選択科目として高校で教えられている。さらに、2005—2006年度からは一部の小学校でパイロット的に5、6年生に仏語または独語も教えられることになっている。一方、少数民族言語に関しては、トラキア地方のイスラム教徒のための学校（小学校235、中学校2、宗教学校2）で児童生徒の母語のトルコ語がギリシャ語と併用して使用されている。しかし、これらの学校の教育に対する政府の支援計画は、児童生徒の母語ではなくてギリシャ語の能力向上を主眼にしているという批判を受けている。<sup>13</sup> 一方、こうした学校以外に、現在のところ全国に26の「国際学校」（原語では「異文化間学校」という表現になっている）が作られ（小学校13、中学校9、高等学校4）、旧ソ連圏その他の国からの引揚者や移民の子供たちの教育が行われている。そこでは、児童生徒のギリシャ語の能力に

応じて授業に英語、ドイツ語、ロシア語が併用される一方で、ギリシャ語を第二言語あるいは外国語として教える教師を配置するなどして児童生徒のギリシャ語能力の向上に努力が払われている。全国にはこのカテゴリーの児童生徒が約13万人いると言われ、そのうち3万人余りがギリシャ系の引揚者の子供たちで、残り10万人程が外国人移民の子供たちである。<sup>14</sup>このような子供たちの学業の遅れや途中で止めてしまう者の数が大きな社会問題になりつつあるが、1996年に始まった国際学校の数は、この種の学校の指定を受けるには引揚者及び外国人児童生徒数が全体の45%に達していることが条件になっているためか、ここ数年増えていない。さらに、母語教育は、「国際学校」の補習科や入門クラスで実施が示唆される（つまり、母語を教えることもあるという表現）に止まり、通常の授業でギリシャ語と併用されている外国語には、この国の大きな言語資源であるはずのこのような移民の子供たちの言語は含まれていない。

一方、大学（全国に22）では、後述の一部の場合を除いて、開講されているのはたいてい「大言語」だけである。唯一英語が提供されているか、あるいはそれ以外に仏、独、伊語からの選択も可能になっているところが多い。履修期間は、2年（つまり、4学期）が一般的であるが、語学の専攻でなくても、4年間必修で課せられていることもある（例えば、テサロニキ・アリストテレス大学のジャーナリズム・マスコミュニケーション学科では英語、また映画研究学科では、英・仏・独・伊から選択）。

しかしながら、1990年代終わりから2000年代初めにかけて、政府は、バルカン地域から黒海周辺地域、また中東地域の政治・経済的動向に対処するべく、こうした地域の言語に重きをおいた学科や専攻をいくつかの大学に新しく設置している。例えば、マケドニア大学では、1998年からバルカン・スラブ・オリエンタル学科が設けられ、言語教育に関しては、1、2年次からロシア語またはトルコ語を必修し、3、4年次には、バルカン地域専攻の場合この他にブルガリア、ルーマニア、セルビアの各言語から一つ、バルカン・

スラブ地域専攻はロシア語の他にブルガリア、ポーランド、セルビアの各言語から一つ、そしてバルカン・オリエンタル地域専攻ではトルコ語の他にアラビア語またはセルビア語を、それぞれ選択必修することになっている。トラキア・デモクリトス大学の黒海周辺国言語・文学・文化学科（2000年設置）では、3年間4つの専攻（ブルガリア地域、ルーマニア地域、ロシア地域、トルコ地域）で、英、仏、独語から一つとそれぞれ専攻地域の言語及びそれ以外の地域の言語を一つ履修することになっている。同様に、これも近年の開設（1999—2000年度から）であるが、エーゲ海大学の地中海研究学科・南東地中海地域言語専攻では、英、仏、西、伊語の他に、ヘブライ語、アラビア語、トルコ語も提供されている。またアテネ大学の言語センター（*Διδασκαλείο Ξένων Γλωσσών*）では、多くの東西の言語（33ヶ国語）が教えられており、その中にはアルバニア語をはじめここで出てきた近隣諸国の言語が含まれている。

高等教育機関におけるこれらの言語の開講は、本来その社会的地位を引き上げるのに役立つはずである。しかし、現在のところ、それらの言語を話す諸国との歴史的関係やそこからの経済的移民の置かれている社会的状態、即ち3Kの仕事や失業問題にからむ労働摩擦等は、容易にそれを可能にするようには見えない。

最後に、学校以外の場所ではどうであろうか。移民をはじめ外国人一般の居住を管轄する機関は、通常外国語の使用が最も予測される場所の一つである。しかし、そこでは、文書、掲示等すべてギリシャ語で、少数言語はもとより英語ですら使われていない。最近（2005年夏）発表された新しい滞在許可申請書（全4ページ）もギリシャ語でしか書かれていない<sup>15</sup>。また、HRW World Report 1998 (p.2)、1999 (p.3)は、司法手続きにおける少数言語の通訳者不足や通訳の不備を伝えている。さらに、少数言語の使用は、碑文や看板などにおいて、法律上は禁止されていないが、現実には当局によって使用が取り締まられていることも伝えている。



## 4. 結 論

KPG 試験制度開設理由は、CFE への準拠により相互比較や認定が容易に出来る、国内や EU 域内の言語資源の地域的・社会的必要に合った試験制度を作ることであった。そこで用いられている、しばしば小さな、言語の有用性や価値をこの制度によって創出し、教育・職業上の移動の資産としてのこれらの学習を推進して、究極的には域内の言語・文化の多様性の確保を図るということであった。

しかし、以上見てきたように、この国では概して政治や社会制度また社会の状態が、国内の豊かな言語資源の有用性や価値を認めるよりも、むしろ否定するものになっている。言い換えれば、ただ外国語教育政策によってヨーロッパの視点を実現できる状況にはなっていない。言語・文化に関しては、少なくともトルコ語話者を除いては、明らかに同化主義政策が取られており、ヨーロッパの価値を実現しようとする外国語教育政策は、他の行政部門との調整なしには拡張実施できない状況にあると言えよう。もっとも、そうした調整の結果が、試験にギリシャ語から外国語への「仲介」問題を含めたことかも知れない。

### 注

1 [http://www.ypepth.gr/docs/kpg\\_%20description.doc](http://www.ypepth.gr/docs/kpg_%20description.doc)

2 この点について詳しくは後の3.3を参照。

3 過去の問題は、次のサイトで見ることが出来る。

(B1については) [http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/past\\_pers.htm](http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/past_pers.htm) (C1については) [http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/past\\_papers1.htm](http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/past_papers1.htm)

4 International Certificate Conference の略。教員研修、実務・専門語学研修、言語能力評価などに関する国際的なプロジェクトを行ったり、欧州評議会とも関係の深い非営利組織で、フランクフルトが本拠地。

5 彼女の「大言語」批判がどのような言説の影響を受けているかは明らかであるが、Bessie Dendrinou (2004) にはそれが明瞭に表現されている。

6 国際的な各試験制度ともここ数年の間に後述の欧州評議会の参照枠組みに準拠した熟達度レベルや評価基準を採用するようになってきている。

7 ギリシャ語版のQ&Aにはこの質問がない。また、英語版(2)の質問に対する答えも同様の内容に言及しているが、ギリシャ語版にはこの質問がない。理解に苦しむところであるが、試験にギリシャ語を含むこと(あるいはギリシャ語から対象言語への「仲介」の問題があること)の説明は、試験の特徴を詳しく説明している別の文書でされている。例えば、[http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/kpg\\_exams\\_b2\\_level.htm](http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/kpg_exams_b2_level.htm) を見られたい。

8 B2及びC1レベル試験に関するこの点の情報は、それぞれ次のところで見ることができる。  
[http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/assessment\\_criteria.htm](http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/assessment_criteria.htm) (p.4) <http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/handouts%20for%20C1%20oral%20training%20seminar.pdf> (p.3)

9 B2及びC1レベルの「仲介活動」部分の評価基準については、それぞれ次のサイトにアクセスされたい。(B1) <http://www.cc.uoa.gr/english/kpg/Examiners-guidelines.doc> (p.9)  
(C1) [http://www.cc.upa.gr/english/kpg/oral\\_examiners\\_material.htm](http://www.cc.upa.gr/english/kpg/oral_examiners_material.htm) (p.15)

10 KPGの受験料は、B1レベルが50ユーロ、C1レベルが60ユーロとなっている。一方、Cambridgeテストの場合は、FCEが126.50ユーロ、CPEが160ユーロである(2004年British Councilで受験した場合)。

11 Delveroudi, p.257, pp.261-262, Endnote7.

12 この「……語を話す人々」という呼び方は、特に国内及び近隣の異民族に対して行われ、政治的、思想的な批判を避ける術としてマスコミ、政治家、知識人など広く一般に用いられている。Greek Helsinki Monitor and Minority Rights Group-Greece (以下GHM) (p.5) 参照。

13 GHM (p.63) 参照。

14 Μάρτυ Παπαματθαίου, “Τι Αλλάζει Εφέτος στα Σχολεία,” *Βήμα* 24 Aug. 2003: A26.

15 この申請書で50万とも言われる不法滞在の移民に一時滞在許可を発給することが企図されている。次のサイトからダウンロードできる。[http://www.ypes.gr/allodapoi/content/GR/docs/Aitissi\\_gia\\_Adeia\\_Diamonis.pdf](http://www.ypes.gr/allodapoi/content/GR/docs/Aitissi_gia_Adeia_Diamonis.pdf)

## 参 考 文 献

Delveroudi, Rea. “The Foreign Language and Literature Departments of the Greek Universities: Observations on Their Nature and Prospects.” Dendrinou and Mitsikopoulou 254-263.

Dendrinou, Bessie. “Linguistic Diversity vs National Language Protectionism: Language Planning in Action in Greece.” Paper Presented at the First Official General Assembly and Annual Conference of European Federation of National Institutions for Language (Stockholm, October 2003). [http://www.eurfedling.org/conf/files/Dendrinou\\_English.pdf](http://www.eurfedling.org/conf/files/Dendrinou_English.pdf)

\_\_\_\_\_. “Multilingual Literacy in the EU: Toward Alternative Discourses in Foreign Language Education Programmes.” Dendrinou and Mitsikopoulou 60-70.

- Dendrinou, Bessie and Bessie Mitsikopoulou, eds. *Policies of Linguistic Pluralism and the Teaching of Languages in Europe*. Athens: Metaichmio, 2004.
- Eckes, Thomas, et al. "Progress and Problems in Reforming Public Language Examinations in Europe: Cameos from the Baltic States, Greece, Hungary, Poland, Slovenia, France and Germany." *Language Testing* 22.3(2005): 355-377.
- Greek Helsinki Monitor and Minority Rights Group. "Greece: Report about Minorities" (1999). [http://www.minelares.lv/reports/greece/greece\\_NGO.htm](http://www.minelares.lv/reports/greece/greece_NGO.htm)
- Hellenic Republic. Ministry of National Education and Religious Affairs. *State Certificate of Language Proficiency*. [2003]: 4 pp. Online. Internet. 18 May 2005. <[http://www.ypepth.gr/docs/kpg\\_%20description.doc](http://www.ypepth.gr/docs/kpg_%20description.doc)>
- \_\_\_\_\_. Υπουργείο Εθνικής Παιδείας και Θρησκευμάτων. *Ενημερωτικό Δελτίο για το Κ.Π.Γ.* [2003]: 3 pp. Online. 15 July 2005. [http://www.ypepth.gr/el\\_ec\\_page3131.htm](http://www.ypepth.gr/el_ec_page3131.htm)
- Human Rights Watch. "Greece: Human Rights Development." *Human Rights Watch World Report 1998*. [1999]: 4 pp. Online. Internet. 12 July 2005. <<http://www.hrw.org/worldreport/Helsinki-14.htm>>
- Human Rights Watch. "Greece: Human Rights Development." *Human Rights Watch World Report 1999*. [2000]: 4 pp. Online. Internet. 12 July 2005. <<http://www.hrw.org/worldreport99/europe/greece.htm>>
- Lukey-Coutsocostas, Kathryn. "Cambridge Rings the Changes." *Athens News* 12 Nov. 2004: A14.
- ジオルダン、アンリ (Giordan, Henri). 「ヨーロッパにおける言語問題」 佐野直子訳 『ヨーロッパの他言語主義はどこまで来たか』 『ことばと社会』 編集委員会編 東京：三元社、2004. 63-79.
- Mestheneos, Elizabeth. "Foreigners." *Minorities in Greece*. Ed. Richard Clogg. London: Hurst & Company, 2002. 179-194.
- Mitsikopoulou, Bessie. "Languages for All Citizens: The Case of the State Certificate of Language Proficiency in Greece." Paper Presented at the Consultation Conference, Language Learning and Linguistic Diversity (European Commission, Brussels, April 2003). [http://europa.eu.int/comm/education/policies/lang/policy/conference/workshops/mitsikopoulou\\_en.pdf](http://europa.eu.int/comm/education/policies/lang/policy/conference/workshops/mitsikopoulou_en.pdf)
- 欧州評議会『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 吉島茂、大橋理恵他訳 東京：朝日出版、2004.

Παπαματθαίου, Μάρνου. "Τι Αλλάζει Εφέτος στα Σχολεία." *Βήμα* 24 Aug. 2003: A26.

Χριστίδης, Α. -Φ. *Γλώσσα, Πολιτική, Πολιτισμός*. Αθήνα: Πόλις, 1999.  
"Υποψήφιος: Το Πρόγραμμα για το Κρατικό Πιστοποιητικό Γλωσσομάθειας."  
*Νέα* 30 Nov. 2004: N31.